

◇ 修士論文要旨 ◇

(昭和 54 年 3 月 卒業生)

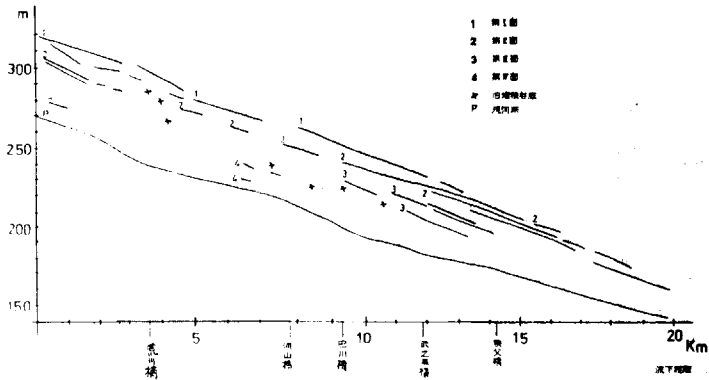
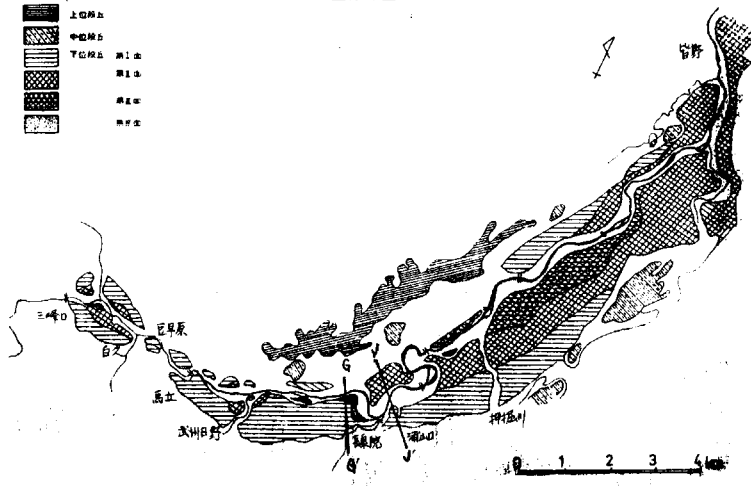
荒川中流下位段丘の地形発達史的考察

上 村 恵利子

本研究の目的は、埼玉県に位置する荒川中流下位段丘の地形発達史を明らかにすることである。そのために、各種地形図の読図や空中写真の判読や野外調査を行なった。本稿では、調査の結果得た知見を報告する。

- (1) 下位段丘は四段の段丘群からなる。これらを上位より、第Ⅰ面、第Ⅱ面、第Ⅲ面、第Ⅳ面と名付けた(第1図)。第Ⅲ面と第Ⅳ面の分布は部分的であるが、第Ⅰ面と第Ⅱ面は、三峰口から皆野にかけて比較的良く発達する。第Ⅰ面と第Ⅱ面は荒川扇状地の寄居の位置する荒川左岸の面と対比できる。
- (2) 下位段丘は豆早原から馬立の狭さく部にも認められる。その上流の三峰口から白久にかけて小規模の段丘が発達する。
- (3) 馬立と長泉院にかけてと、浦山口から押掘川にかけて、下位段丘の中に旧埋積谷が、北東方向に円弧を描いて分布する。前者の旧埋積谷の幅は約 250 ~ 300 m、埋積層の厚さは 11 ~ 34 m である。後者の旧埋積谷の幅は最大で約 1500 m、埋積層の厚さ 19 ~ 45 m である。後者は前者よりも旧埋積谷を広げて、埋積層も厚く、埋没段丘を伴う。
- (4) 第Ⅰ面の旧埋積谷の部分は fill top terrace である。巴川橋から押掘川にかけての旧埋積谷を伴う部分の第Ⅱ面は、fill strath terrace である。旧埋積谷を伴わない下位段丘は strath terraces である(第3図)。
- (5) 縦断形では下位段丘の四段の段丘群と旧埋積谷底は武州日野付近でわずかな傾斜変換点をもつ。しかし、その他で縦断方向に傾斜の著しい変化はみられない。旧埋積谷底縦断形は浦山口から押掘川にかけて、現河床とほぼ平行である(第2図)。
- (6) 段丘堆積物は主に砂と礫である。層理はあまり発達せず乱雑な堆積層である。著しい層相の変化や粘土層・砂層の発達もない。

第1図 段丘分布図



第2図 下位段丘縦断投影図

